人・間・模・様
古・河・模・様

人から学び 人に伝えていきます

嶋村正美 さん
（東一丁目・80歳）

地域の輪づくりを

平成２年にいわゆる「生涯学習振興法」が制定され、情報化、国際化、余暇の増大、高齢化社会の到来など急激に変化する社会に対応するため、生涯学習が正当に評価される社会、すなわち生涯学習社会の形成が望まれています。

そこで今回は、手品の講師など幅広く活動し、生涯学習を実践している嶋村正美さんを訪ねました。

「国鉄を 55歳で定年になってから公民館の講座で日本画・水墨画・竹細工など、ほかに篆刻、民謡なども習いました。文化協会の落語会にも入っています。他人にできて自分にできないことはない、という気持ちと好奇心が旺盛なせいか何にでも挑戦をしましたね。手先が元々器用な方で、日曜大工も好きでいろいろな物をつくっています。手品は、勤めていたころから趣味としてやっていました。公民館の講座でも手品を勉強して、講師にもなりました。その後、 12～ 13人で手品研究会をつくり勉強を続けています。技術はテレビを見

ぶんがくかん発 Vol.68

多くの後進を育成、校歌の作詞でも活躍「興野倉藏」

若草（昭和 26年歌会始詠進歌）
「箕を売るとわが来し村の山べには
出づる水あり芹さわに萠ゆ」

朝空（昭和 27年歌会始詠進歌）
「朝空のひかりを待ちて道の書
論語を読みし年も離りき」

宮中の歌会始の詠進歌２首を冒頭に記しましたが、今回は 2首の歌を詠んだ歌人興野倉藏を取りあげます。

興野は、茨城県立第二高等学校で 20年以上も教鞭をとっていましたので、市内には直接教えを請うた人もたくさんいることと思います。

高等学校の国語科教師としてのイメージの強い興野ですが、 20歳のころから始めた短歌、校歌の作詞、社会教育など多方面で地域の文化振興に貢献いたしました。

興野は、明治 35年１月 28日、茨城県東茨城郡小松村（現常北町）に生まれました。

母校「小松小学校」の歌碑の前にて

大正９年に茨城県立水戸商業学校を卒業後、恩師の推薦により京都帝国大学会計課書記に任ぜられましたが、病を得て淡路島に療養いたします。教師としての出発は、大正 11年の東茨城郡河和田小学校の代用教員からでした。その後文部省（現文部科学省）の検定試験に通り、茨城師範学校（現茨城大学）の教諭、和歌山県や新潟県の教諭等を経て昭和 20年３月茨城県立高等女学校（現古河二高）の教諭となり昭和 42年まで 22年間勤めました。

高等学校での授業について、教え子の故井上守氏は、「先生は文字や言葉について、一字一句いささかもゆるがせにせぬ厳しさで指導された。同時にユーモアに満ちた語り口で時に私たちを笑わせ、授業は楽しいものであった。」と語っています。

短歌については、 20歳のころから作歌を始め、アララギの斎藤茂吉から指導を受け、 70年にわたり歌をつくり続けました。その間、『新万葉集』に約 10首が収録されたほか、戦後宮中の歌会始に２年連続で入選しています。

古河二高退職後は、公民館の古典文学講座の講師等を務めるほか、地元古河の「わたらせ短歌会」、総和町の「短歌俳句愛好会」の指導的な立場にあり、『まくらが』刊行にも参画。古河第１小学校や母校の「小松小学校」等の校歌の作詞でも活躍しましたが、平成 4年７月満 90歳で逝去されました。没後家族の手により『興野倉藏遺歌集ざくろ』が出版されています。